芭蕉と北斎

芭蕉（一六四四―一六九四）が生きたのは、四代将軍家綱、五代将軍綱吉の治世で、将軍の統治力が強まり個人の自由が制限される反面、そうした重苦しさをはねかえすように華美を競い、生活態度に精神的な抵抗を見せた時代でした。歌舞伎の隆盛、井原西鶴の浮世草子人気などに代表される当世の風潮のなかにあって、自我を消去するところに至高の境地を求めた芭蕉の姿勢は生涯変わることがありませんでした。

天和二年（一六八二）の暮れ、駒込の大円寺から出た火事は瞬く間に本郷、神田、日本橋、浅草、本所に燃え広がり、深川の芭蕉庵も火に囲まれて芭蕉は命からがら逃げ伸びます。芭蕉三十九歳のときのことです。このとき、秋元家家老で俳句の弟子である高山伝右衛門繁文（俳号麋塒）のすすめで谷村の屋敷に5ケ月間逗留したといいます。貞享元年（一六八四）の関西への旅（「のざらし紀行」とも呼ばれる）の帰途、木曽から甲州街道を経てわざわざ麋塒宅に立ち寄った折りには久しぶりの再会を果たしています。ふたりの師弟愛を超えた心のつながりは芭蕉の晩年まで続き、三度目の谷村来峡の約束を果たせぬまま、芭蕉は旅をすみかとした五十一歳の生涯を閉じました。

江戸時代を代表するもう一人の鬼才葛飾北斎（一七六〇―一八四九）は、「北斎漫画」や「富嶽三十六景」などであまりにも有名な浮世絵師ですが、この北斎が下絵を描いたと伝えられる屋台飾幕が都留市下町に残されています。都留市文化財「虎」で、緋ラシャの地に竹林を背景にした雌雄二匹の虎が、ギヤマンの両眼を爛々と光らせ躍動感豊かに表現されています。片隅には「東陽画狂人北斎筆」と落款が縫い取られています。

この屋台飾幕は今も屋台に取り付けられ、「鹿島踊」（新町）「牧童牛の背に笛を吹く」（早馬町）とともに都留市最大のイベント「八朔祭」で目にすることができるほか、今年オープンした「ミュージアム都留」に常時展示されています。

●松尾芭蕉流寓の跡碑
芭蕉が流寓生活を送ったと言われるゆかりの地、女性センターの入口前に碑がある。市内にはこのほか6ヵ所に芭蕉の句碑が建てられている。

●八朔祭屋台飾幕
屋台飾幕には、後幕・中幕・水引幕があるが、後幕は屋台の後ろ部分をコの字型に張り回して華やかさを競い合う。昭和48年に保存会を発足させて補修・復元にあたり、9枚の飾幕が補修されている。